「才能の伸長」を図る児童の学部訪問から

藤　井　浩　史
（附属高松小学校）

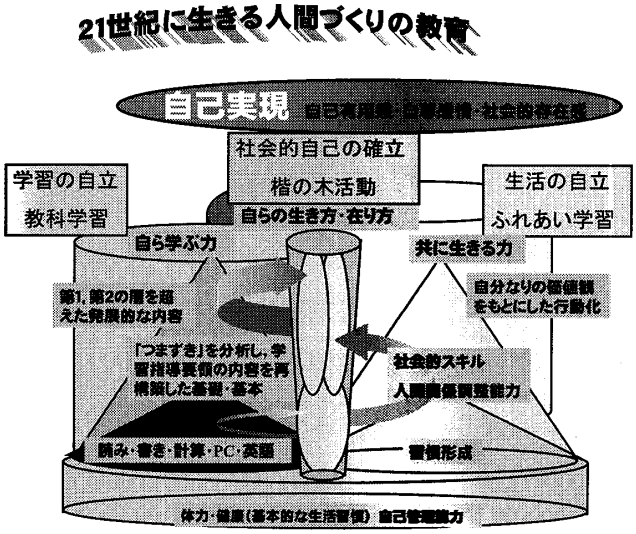
キーワード　才能の伸長　学部訪問　自己実現　楷の木活動　本物体験

1　本校の研究の概要

文部科学省指定研究開発学校３年次
研究主題
「つまずき」の分析に基づく基礎・基本の着実な習得と社会性の育成を踏まえた社会的自立を促すために，積極的に一人一人の子どもの「才能の伸長」を図る教育課程の開発

戦後50年余りの教育は多大な成果を挙げ，我が国の政治や経済，文化などの発展に大きく貢献してきた。国際化や情報化など社会が大きく進展する中で，豊かな才能をもち創造性に富む人材が新たに求められている。そこで本校では，一人一人の子どもがもつ才能に目を向け，その伸長を図り，一人一人の社会的自立を促す教育をすることこそ新しい学校教育の方向であると考えている。本校が考える「才能」とは，物事の真理を追究し，本質に迫り，事を巧みに成しうる資質・能力であり，その子らしい，その子ならではの特性や能力である。才能は秘めた部分が多く，レベルの違いこそあれ全ての子どもが持ち合わせているものであると考えている。こうした才能を開花しながら，未来社会に夢と希望を持ち，社会の一員としてよりよい生き方を求め，たくましく創造的に自己実現に取り組む子どもを育成することを目標に教育実践をしてきた。

そして，学校教育の中での才能を「個人内差異」とみていき個性的創造的な子どもを育成することが，将来自分の才能を社会的に開花し21世紀に生きる人間づくりとなると考えた。「才能を伸長している姿」を「自己実現に向かい，個性（よさや可能性）を創造性によって可能な限り伸ばしているもの」と捉えることにした。小学校教育においては自分らしい見方，考え方で追究していき，その姿をメタ認知していくことが，将来も真の自分の目標に向けて進んだり，社会的に評価される能力を発揮していく人間づくりにつながると考える。従来，個性の研究がさかんに行われ，個性を認めそれに応じた教育の在り方が問われていた。本校の研究は個性と創造性を併せて見ていくことによって子どもの学びを動的に捉え，積極的に両者を高めていこうとするものである。才能は個人内の閉じたところで語るのでなく，むしろ積極的に対象とのかかわりから見ていこうとしている。人間は他者との関係が保証されなければ生きていけないことに目をやり，他者との関係の中で生きる子どもを受け止めることこそ重要である。教師はそのためにふさわしい環境の一つになろうとしている。これが結果的には個人の才能を伸長できることになる。



2　才能を伸長するカリキュラム

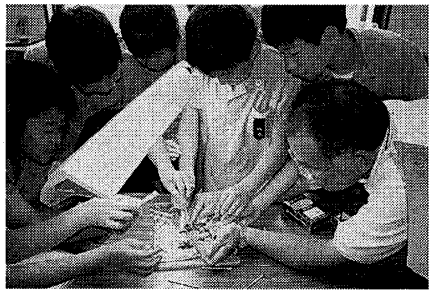
本校では１活動２学習のカリキュラムを構想し，その中心に才能の伸長を位置づけている。総合的な学習の時間に相当する楷の木活動の時間を拡充しているが，教科学習，ふれあい学習も含めた教育活動全体で才能の伸長を考えている。

総合的な学習の時間にあたる楷の木活動は，いわゆる小学校完結型ではなく，生涯学習における学びという視点を大切にした活動である。子どもの姿を単に小学校教育の中だけで語るのではなく，就学前期（家庭教育），幼稚園期，小学校期，中学校期など，校種間の連続性，人間形成の発達の視点から構想するのである。子どもたち自身が自分の将来に対して夢や希望がもてるように「将来に開かれた学び」にすることである。

3　学部訪問

高学年楷の木活動では，学部訪問を行っている。児童が香川大学の専門的な施設で研究を積み重ねている研究者の方々と交流することによって，研究の喜びや苦労を感じ取り，児童がこれからの学びに対する意欲を喚起することをねらいとしている。また，学部間の連携事業としても取り組んだ。対象は附属高松小学校５，６年生児童。学年に関係なく教育学部オープンキャンパスの「未来からの留学生」への参加，５年生は農学部，経済･法学部へ，６年生は医学部，工学部（本年度はオープンキャンパス）へ行く。

医学部訪問では，カエルの解剖，田中耕一さんのノーベル賞受賞の研究による機械，電子顕微鏡について，体験を通して学習した。カエルの解剖は事典などの写真で見ることはできるが，実際に綿棒で内臓にふれるときに子どもたちの変容が明らかに見えた。麻酔がきれてカエルが動き始めたときには，生命を目の当たりにしたことで言葉を失った場面もあった。最初は軽い気持ちで内臓にふれている子どももいたが，担当の先生が，この子どもたちを受け入れ興味を高めるような話をしてくれたため，体験の最後には生命に対してもカエルに対しても内面からの変容があった。また，医学部研究棟という場所で先生方に質問できたことも貴重な本物体験である。専門のことに関しては熱のこもった話，不明なことについてはわからないと率直に答えてもらったことが子どもたちに印象深く残っている。



医学部でのカエルの解剖

今日の医学部訪問はとても思い出になりました。また、しょう来の夢を描くポイントになりました。医学部で本物にふれるという体験はとても貴重なものとなりました。電子けんび鏡などは普通に生活していると出会えないものですが、自分でさわるということができてよかったです。お時間がない中で私たちのためにこんなことをしていただいて本当に医学部の先生方に感謝したいです。私のしょう来の夢は医者ですが、しんさつするだけの医者ではなく研究などをするのもいいな…と思いました。

医学部訪問後の児童の感想

4　新たな学部と附属学校園の連携を展望する

学部と附属学校園は，従来から研究と実践の関係で結ばれている。本校の研究においてもこの関係は，研究発表会，研究開発に関わる運営指導委員会，研究授業の指導など多岐にわたって実績を残してきた。附属学校園は研究実践の場であるが，これからの学部との連携に学校現場の主役である児童生徒を第一に考えた連携も必要である。本校の立地条件を生かして研究実践に関与する試みとしての学部訪問は価値があると考える。実際に楷の木活動への影響は大きかった。これまでのように附属学校園に講師として招くだけでなく，逆に訪問していく姿勢をもち，教員を志望する学生との交流を含め，今後も児童生徒に直接関わる連携を模索していきたい。